

浦賀文化

第79号

令和6年10月1日発行

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

鳳凰丸の建造③ ― 鳳凰丸の見分（与力・同心の動向） ―



浦賀駅前の絵画「中島三郎助と鳳凰丸（部分）」

浦賀で建造された初の国産洋式軍艦鳳凰丸は嘉永七年（一八五四年）五月に竣工し、翌年の安政二年二月に品川沖で老中・若年寄をはじめとする幕府の重役たちの見分を受けることになった。鳳凰丸が見分を受けたのは二月晦日から三月一二日までで、二五〇人以上の役人及びその関係者が鳳凰丸の帆走の様子や与力・同心たちによる小筒調練・大砲の打ち方の見分に訪れたという。この鳳凰丸の見分については『新横須賀市史』の解説や西川武臣著『浦賀奉行

所』、『横須賀開国史シリーズ5 幕末軍艦建造記』などでも取り上げられているところではあるが、ここではあまり注目されてこなかった「見られる側」と「見る側」についてとりあげたい。まず、見られる側である浦賀奉行所与力・同心たちの動向を見てみよう。

鳳凰丸が見分のため大森沖まで航行したのは安政二年（一八五五年）二月二七日のことであった。乗組員は浦賀奉行所与力・同心に足軽や医師、水主等を加えた一〇四名で、与力・同心は前年五月に行われた試験航行の時とほぼ同じメンバーだが、乗組員の与力たちからの要望をふまえて医師などを加えていた。

目的地に到着して早々、江戸詰めめの浦賀奉行土岐朝昌に報告をおこなった。その役は与力樋田多々郎、同心小原勇次郎・河野四郎左衛門の三人であったが、当日に河野が病気になる、代役を中田辰蔵が務めている。河野は乗り組んでいた医師栗山周輔より上陸願いが出されたこともあって土岐朝昌の役宅に移された。乗り込んだ医師は早速仕事をすることになる。

二十八日、見分の際の心得が

示され当日のスケジュールが確認された。翌二九日、江戸在勤の浦賀奉行所与力岡田増太郎と同心田浦福太郎が鳳凰丸に乗り込んだ。鳳凰丸の乗組員は、ほぼ全員が浦賀から乗り込んだ。このように病気でやむなく下船する者や、業務の都合で江戸から乗船する者もあった。もともと中島三郎助などは、二月二九日の記事に「一昨日より三郎助持病二而相臥候二付、豊前守様より御医師被遣候」とあるように、持病で寝込んでいたが下船はせず、土岐朝昌から医師を派遣してもらい船中で養生していた。中島は、同じく与力の佐々倉桐太郎とともに見分の際の責任者で要人の案内・質疑応答を担当していたという。こ

水戸藩に建造させた旭日丸で、これにあわせて同心の斎藤太郎助が浦賀から呼び寄せられた。斎藤は初めから鳳凰丸の建造に携わっており、この見分では乗組員には選ばれず、浦賀で業務に当たっていたものと思われる。それが老中の見分があるからといって呼び出されたのは、建造中の軍艦などを見分させる目的もあったのであろう。これは技術の吸収に対する浦賀奉行の熱意のあらわれだろうか。斎藤はというと、見分が終わると早々に浦賀に戻ったようである。

また品川台場などを見学する直前の三月六日には、豆州戸田浦でロシア人により建造されたヘダ号を中島三郎助・佐々倉桐太郎が見分に行くことになり、彼らは鳳凰丸の見分が終わったあと息つくまもなく戸田へ行くことになった。

（山本 慧）

★参考資料

- ・『新横須賀市史』資料編 近世Ⅱ
- ・『浦賀奉行』西川 武臣著（有隣堂、2015年）
- ・『横須賀開国史シリーズ5 幕末浦賀軍艦建造記』（横須賀市、2002年）

浦賀奉行所跡の発掘調査（その七）

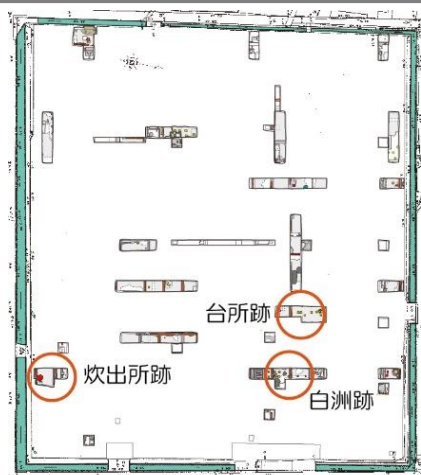
出土した江戸時代の土器・陶磁器類ほか



今回は江戸時代の碗類以外の主な土器・陶磁器類を紹介します。

写真の1〜5、7〜9は愛知県から岐阜県にかけて焼かれた瀬戸・美濃系の陶器類です。1は灰釉の折縁皿で口

径約二六センチの大型品、2は鉄釉の灯明受皿、3は台脚のついた透明釉の灯火具、4は側面と底部外面に墨書があるいわゆる貧乏徳利と言われる酒をいれた容器の底部付近、5は灰釉の徳利上部、7は耳（小さな取っ手）が二つ付いた首の短い灰釉の短頸壺、8は透明釉の小型の短頸壺、9は灰釉の小鳥の餌入れです。写真6は九州佐賀県産の肥前磁器で蛸唐草文の神酒徳利、10は大阪から兵庫県で焼かれた堺・明



第Ⅱ期の主な遺物出土遺構

石産の播鉢片、11は江戸（東京）近郊で焼かれた瓦質の土器で、側面が大きく開けられており、中で炭を燃やした火鉢の一種。茶釜などを上に置いて湯を沸かした風炉と思われます。

これらの中で、3の灯火具と6の神酒徳利、10の播鉢、11の風炉は文政四年（一八二一年）に始まる奉行所Ⅱ期の中島家絵図に記された炊出し所跡、7の徳利は同絵図の白洲跡、4と5の徳利、8の小型短頸壺、9の餌入れなどは同図の台所跡付近から出土です。

いずれも江戸城を中心とした江戸遺跡などでは一般的にみられる焼物類で、特に優品ではありませんが、7を除きそれぞれの施設の性格を反映した出土遺物かと考えられます。これらの他にも多様な土器・陶磁器類が出土していますが、いずれも小片で、その量も僅かでした。

（中三川 昇）

★参考資料

- ・「浦賀奉行所（役所）跡の試掘・確認調査」横須賀市教委2021
- ・「浦賀奉行所開設301年 浦賀奉行所跡」横須賀市教委2021



江戸時代のその他の陶磁器類（縮尺 約1/4）

秋の
行楽シーズン到来！

当館で浦賀の散策マップを
お配りしています！



Dock Café 7

― 二人の海軍出身社長 後編 ―

寺島が社長を退いて通信大臣になると、業界・財界と浦賀船渠をつなぐ強力なパイプ役となる。

二人目の堀は、明治一六年、大分県に生まれる。寺島と同時期に海軍を離れる。昭和一六年、寺島に替わり浦賀船渠九代目の社長になると、海軍のさらなる艦艇需要に対応するため、台湾に工場を新設するなど事業規模の拡大を図っている。堀は日本飛行機の取締役も兼務、そちらの事業に注力していたことから、実際のところは次期社長となる甘泉豊郎が実務をおこなっていた。

戦後すぐ、堀は浦賀船渠を去ることになるが、在任中、海軍の発注により数多くの駆逐艦・海防艦などを建造している。

堀は人並外れた英才として知られており、いずれは海軍大臣と目されていた。しかし、自ら「戦争悪論者」と称し、戦争に反対したことから、海軍を追われている。堀は、聯合艦隊司令長官・山本五十六と無二の親友であった。

（江）

